

## 人類学者と探偵：ある殺人事件をめぐる考察

武井秀夫（千葉大学）

キー・ワード： 北西アマゾン、殺人事件、調査と捜査、殺意とコスモロジー、外来資源

### Anthropologist who worked as a detective: Rethinking a murder case

HIDEO TAKEI (Chiba University)

Keywords: Northwest Amazon, murder, fieldwork and crime, intent to kill and cosmology, foreign resources

#### 1. はじめに

事件が起こったのは1987年12月24日午後、コロンビア・ブラジル国境を東西に流れるティキエ川のブラジル側、カチベラ L でのことである。L はコロンビア側のトゥユカ集落 A と、その50Kmほど下流のブラジル側集落 X との間の中間点より上流に位置しており、L の上流と下流にそれぞれトゥユカ集落 B と C がある。事件は集落を二分する銃撃戦が勃発しかねない衝撃をもたらした。この事件の殺意の形成に関わるコスモロジカルな側面については以前に論じているが [武井 1995]、今回は事件の全体像からさらなる考察を加えてみたい。

#### 2. 集落 A の四つのグループ

A は東西二つの住区に分かれ、東には教会と寄宿制の初等学校、神父、シスター、教員の宿舎があり、ティキエ川流域唯一の警察官 J とその近親者の4家族が住む。西には前の首長 S とその弟、S の息子らの3家族、現首長の M とその兄弟らの4家族、そして唯一の他言語集団バラに属する P の家族が住み、ティキエ川流域を管轄するヘルスポストが置かれている。ヘルスポストは、この年11月に保健指導員として任用された M の次男 G が管理するようになった。また、P は教会の売店の経営を任されていた。

北西アマゾンはランク社会で、トゥユカもランク的に上位グループと下位グループに分かれ、前者がイナンプ川流域、後者がティキエ川流域をテリトリーとしていた。そこへ、イナンプ川流域でのランク争いに敗れた S と M のグループがティキエ川に移り住み始めた。最初はテリトリーから追い出されそうになったが、布教に来た

神父の執り成しで現住地に居住が認められた。その後、J から下位の上位グループ者が加わった。布教が神父 F に引き継がれるや、自分たちがティキエ川流域の最高ランクグループであると主張し、流域の中心集落の地位を得た。それにより、教会と売店、学校、ヘルスポスト、警察官駐在所等、外来資源の源泉を集落 A が独占することとなり、本来のテリトリー領有者である下位グループの集落に対する地位も逆転した。外来資源とその管轄者へのアクセスの重要性は4つのグループのリーダーたちだけでなく、集落の子供たちの間でさえも自明なことのように認識されていた [武井 1992]。

#### 3-1. 事件の概要

発端は23日昼頃 J が P と G を誘って、下流ブラジル領内の X へクリスマス用品（蒸留酒、花火、クラッカー、装飾品等）の買い出しに行ったことである。翌日、午後4時頃 J と P のみが集落に帰り着き、G が泥酔してカチベラ L に転落し、奔流に呑まれたままになったと主張した。急を聞いて駆け付けた M らが J、P や J の近親者たちと激しい口論になったが、神父 F と筆者が間に入り、散弾銃の銃撃戦は回避された。

#### 3-2. 人類学者、探偵になる

筆者はティキエ川流域を調査地とする過程で、パウペス地区保健局から地域の結核の現状調査と診療所職員（准看護師相当の看護職と保健指導員）の監督指導の依頼と、筆者自身の調査への全面的支援の提供という提案を承諾していた。それゆえ、保健指導員 G の行方不明という事態は、M の意向とは無関係に、彼らに何が起こっ

たのかを明らかにする必要を突き付けていた。しかし、彼らの激しいやり取りからはただならぬリスクも感じられた。リスクを回避してどう調べるか。筆者は探偵を始めることになった。

事件翌日、MらとXに往復し、途中の全トゥユカ集落に立ち寄り、目撃者の証言を集めた。

カチベラLを迂回する道で、争ったものと推定される痕跡をいくつか発見したが、決定的なものは見つからなかった。(後日、事件の決着後に、他集落の通行者がさらに奥の森の中に、はっきりした争いの後を発見したと聞いた。)

X集落でも、警察や商店主などに話を聞いた。彼ら3人の盛大な飲みっぷりのおかげで、Xでの行状は良く分かった。問題は帰路で、目撃証言も少なく、彼らが皆酔っぱらっていたという以上の情報は得られなかった。

Gの遺体は12月29日にカチベラLの下流で発見され、発見者の属する下流のC集落の墓地に埋葬された。その日、県都ミトゥで連絡を受けた筆者は、翌早朝、検視医、検視証人、救急隊チームとともに現地に向かい、検視を見守った。

Aから2時間以上も下って、検視は雨の中、集落の住人たち環視の下で行われた。泥濘の中何とか棺を掘り当て、蓋を開けて遺体を確認したものの、遺体の搬出は困難なので、遺体は棺中のままで検視が行われた。Gの遺体には頭部に切創、左胸にもかなり深い刺創があり、それが致命傷であるという確証は得られないものの、殺されたことは明らかであると検視医が判断し、筆者たちは検視調書にサインして検視を終えた。

### 3-3. 事件の結末

カチベラLやX集落で決定的な証拠は何も出てこなかったことを知った後、Jは県都ミトゥに飛び、判事や警察に自分の言い分を伝え回った。

しかし、遺体発見の報が届くと、Jのグループ4家族は早々に集落を出て行った。Pは叔母の夫であるMの弟に庇護されて、集落に留まった。

結局、事件は証拠不十分で、Jは無罪放免となった。警察官の職は辞さねばならなかったものの、罪には問われなかった。雨中の検視が不十分と判断されたことが決定的であった。

### 4. 考察：事件はなぜ起こったのか

事件の前にJとPに起こっていたことは引き金として重要だと思われる。Jの父は集落Aで最も経験豊富なシャーマンであったが、イニシエーション儀礼を任せないという形で首長のMに能力を否定され、失意のうちに数年前に結核で死ぬが、このとき復活とMへの復讐を誓ったという。87年8月には妻がイトコと駆け落ちし、11月には母が焼き畑からの帰路に「魔物」に襲われて死ぬ。Jは屈指の略の使い手であり、それによって警察官にも任命されているが、同時に、妻や母の一件をMによる邪術の結果と考えていた。特に後者は、父の復活を悪用されたと考えていた。Jは復讐のためにリボルバーの取得を試みたが失敗に終わっている。他方、Pは父が邪術の嫌疑で同胞たちに殺され、Aに逃れてきた。教会から任された売店経営が軌道に乗ったところで、今度は、その経営権を引き渡すようGから圧力を掛けられていた。Gは伝統的権威を笠に様々な外来資源にアクセスしてきた首長の父Mを見てきており、今度は自分で実践したのである。

事件を生じさせた主要因には、集落内の権力をめぐる争いと外来資源へのアクセスをめぐる争いがあげられる。人間的には前者はJとM、後者はGとPの間の争いであるが、見方を代えれば、ランク社会に根差す伝統的権力と国家や教会が持ち込んだ近代的な制度的権力のせめぎ合い、呪術的なコスモロジーと学校教育の浸透を背景とした合理主義的な世界観の競合と混淆がもたらした混沌の中のもがき合いとも見える。この争いの解決として彼らが手にした手段が刃物による殺人であった。外部から持ち込まれる欲望が次にもたらすのは何なのだろうか。

#### 【主要参考文献】

- 武井秀夫、1992、「保健所という名のカーゴ：北西アマゾンにおける制度的医療の受容の一側面」、『人類学と医療』（講座『人間と医療を考える』第4巻）、波平恵美子編、pp.44-69、弘文堂。
- 武井秀夫、1995、「内なるコスモスのズレと異性」、『Ronza』3号、pp.139-141、朝日新聞社。